

は、釣りというかたちで描かれていたわけである。⁽⁹⁾

釣りをしている鬼は、裸ではなく衣をまとって、頭にはかぶりものをして、それが『石山寺縁起』絵巻の比良明神の頭のなりとかさなってみえるのは、ぼくの乱視のせいだろうか。

ついでだ、乱視まかせにこんなはなしをつけくわえておこう。

剣地の南、金沢寄りの海辺に羽咋はくいという地がある。気多けた神社という能登屈指の大社のあるところで、その神威は日本海一円におよんでいる。十世紀に編まれた『延喜式神名帳』えんぎしきじんみょうちようは、但馬・加賀・越中・越後に気多神社をのせ、『三代実録』は越前・飛驒にも気多の名を伝える。日本海文化の研究に多大の功績を残した浅香年木氏あさかとしき（一九三四〜八七）は、このひろがりをもとまった政治志向を抱く圏層とみなし、「気多政治圏」とよんだ。とうぜんながら、新潟は、能登同様にこの圏内に属するわけだ。

新潟の居多けた神社は頸城郡くびきにあるらしいが、その頸城地方には、山姥が水床から三十間も離れた岩の上で髪をすき、その髪が水面にとどいていたというはなしが伝わっている。これは、ぼくには、ほとんど山姥の釣りの情景である。釣りとは海と山というふたつの異界を、糸と竿と針で結ぶ行為なのだ。山姥の使う釣り針は、どこでつくられたか？ 剣地には、初夏というにはまだ冷たい風が吹いていた。